

令和 7 年度

入学者選抜学力試験問題



国語（前期）

〔注 意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は 12 ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、4 枚の解答用紙に受験番号および氏名を必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、用語、表記、構文にも注意して書くこと。
7. この冊子は持ち帰ること。

一
次の文章は、二〇〇一年に刊行された書籍の一部である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

著作権の関係で公開できません。

１～７ページ

著作権の関係で公開できません。

著作権の関係で公開できません。

著作権の関係で公開できません。

著作権の関係で公開できません。

著作権の関係で公開できません。

注 西岡常一——宮大工の棟梁で、奈良の法隆寺の解体、修理に携わった。

(前田英樹『倫理という力』一部改変)

著作権の関係で公開できません。

問一 二重傍線部(ア)のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 「本能」「知性」「知恵」それぞれについて、道具との関係に言及しつつ一二〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(1)「〈物の学習〉」とはどのようなことか、五〇字以内で簡潔に説明しなさい。

問四 倫理学と〈物の学習〉の関係について、本文ではどのように述べられているか、一〇〇字程度でまとめなさい。

問五 生活の中にみられる、人が〈物の学習〉によって知恵を育てている事例を挙げなさい。

問六 傍線部(2)「〈記号の学習〉」とはどのようなことか、三〇字以内で簡潔に説明しなさい。

問七 傍線部(3)「これら二方向の間には、分化を必要としただけの性質上の対立がやはりあったのである」とあるが、この「対立」

の内容を九〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章は、『住吉物語』の一節である。男性主人公である「中将」は「姫君」に思いを寄せていたが、「姫君」の継母の計略によつて「姫君」の異母妹にあたる「三の君」と結婚させられてしまふ。「姫君」は継母から逃れるために京を離れ住吉に身を隠すが、「中将」は「姫君」のことを忘れられず居場所を探し続けている。以上をふまえて、あとの問いに答えなさい。

さて、はかなく弥生やよひのころにもなりぬれば、住吉にはつれづれの余りに、「いざや、水際の景色のどかなるらん」とて、尼君注①、侍従しじゆういざなひて、浜に出でてぞ遊びあそたまへば、をかしき貝ども、花の散りたるやうにて、みる、青海苔のりなど見たまひて、「あはれ、これを中の君、三の君などと、思ふことなくて、もろともに見せきこえばや」と、おぼしめし出ではべる。侍従はさまざまに貝ども拾ひて、袖に入れ持ちて参らせたれば、姫君、つくづくと浦の方をながめおはして、かくぞおぼしつづけはべる。

世の中にわが身ひとつを住みわびて知らぬ浜路に年をふるかな

とながめたまふ折節、下衆女げすあやしき姿にて、桶おけといふ物をいただき、連れてあまた来れば、立ち隠れたまひぬ。

さて、姫君のたまひけるは、「かひなき命長らへたるよし、いかでか中納言殿注④に知らせたてまつりたらんに、いかに嘆かせたまはんと思ひやるも、罪深ければとて、尼君のもとに京のことよく知りたる童わらわのあるを召し、「この文、しかしかの所へ持ちて行き、『いづくより』と人問ふとも、物言はで走り帰れ」と、よくよく教へてやりはべる。

童注⑤、その日の暮れ方に上り着きて、教へたまへるまゝに、正殿せうでんの西の妻戸にて、「文参らせん」と言へば、「いづくより」とて、半者出でて、取りて入りぬ。中の君、三の君、折節姫君のことおぼし出でて、恋しがりはべるところに、この文を見たまひて、「いづくよりの文ぞと、使ひに尋ねはべれ」とのたまへば、出でて見るに、人もなし。かくと申せば、^(イ)「あやしく、ゆゑあるさまの文にこそ」とて、広げて見たまへば、姫君の御手にて、「世の中に心憂くてのみはべりしかば、たれたれにも知らせたてまつらず、隠れはべりしを、いかにあやしき者におぼすらん。命ばかりはいまだはべれども、この世にていまひとたび、^(C)殿よりはじめたてまつりて、見まめらせんことかたくはべれば、何よりも、殿のおぼしめすらんことを、朝夕嘆きはべりながら、背きたてまつるやうにおぼすらん、その咎とがは許させたまへ」とて、奥には長歌あり。「中略」中の君、三の君見たまひて、泣きたまふこ

と限りなし。さて中納言殿に、かくと申したまへば、「かの使ひを返しつらんことの口惜しさよ」とて、人を分かちて尋ねさせけれども、さらになし。これを見たまひて、いよいよ嘆きたまふこと、言へばなかなかおろかなり。

中將おぼつかなさ^{注⑥}に、御前^{おまへ}の方におはしたれば、三の君、かくなど語りて泣きたまへば、「いとあはれなることかな」と、もろともにうち泣きたまへば、物のあはれを知りて泣きたまふとおぼず^D、はかなかりける。対^{たい}にとどまりたる女房たち、「いかでかおはし所を知らん」などと嘆けども、かひなし。中納言殿、あはれにありがたくあたりたまへば、一人も散らずしてあり。この文を見て、いとど悲^めしみあひたり。中將いよいよ心空になりて、いたらぬ所なく神仏の御前に参り、ただ、「この人のあり所を知らせたまへ」とぞ申したまひける。

(『住吉物語』による)

注 ① 尼君——「姫君」の亡き実母の乳母で、現在「姫君」を庇護^{ひご}している人物。 ② みる——海藻の一種。

③ 中の君——「姫君」の異母妹。「三の君」の同母姉。

④ 中納言殿——「姫君」たちの父。後の文に見える「殿」も同じ人物を指す。 ⑤ 半者——召使い。

⑥ 御前の方——ここでは妻である「三の君」の居所をいう。

⑦ 対——「姫君」が父の邸宅にいた時に住んでいた建物。「姫君」に仕えていた女房たちが今も住み続けている。

問一 二重傍線部(a)・(b)について、それぞれ文法的に説明しなさい。

問二 波線部(ア)・(ウ)の主語を四字以内で答えなさい。

問三 傍線部A・Cをわかりやすく現代語訳しなさい。

問四 傍線部Bについて、どのようなことを「おぼしつづけ」たのか、和歌をふまえて説明しなさい。

問五 傍線部D「はかなかりける」は、誰がどのように考えていることについて述べられているか、六〇字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

景公^{注①}出^ス獵。上^{リテ}山見^ヲ虎。下^{くだリテ}沢見^ル蛇。帰^{リテ}召^シ晏子^{注②}而^ニ問^{ヒテ}之^ニ曰^{ハク}、「今日寡^{注③}

人出^シ獵、上^レ山則見^ヲ虎、下^レ沢則見^ル蛇。殆^{ほとんど}所謂^{注④}不祥也。」晏子対^{ヘテ}曰^{ハク}、

「国^ニ有^ル三不祥、是^(イ)不^レ与^ヲ焉。夫^(b)有^{リテ}賢而^ル不^レ知^ラ、一不祥^{ナリ}。知^{リテ}而^ル不^レ用^ヒ、二

不祥^{ナリ}。用^{ヒテ}而^ル不^レ任^ゼ、三不祥也。所謂^(ウ)不祥^ハ、乃若^レ此者。今上^{リテ}山見^ル虎、

虎^{注⑥}之室^{ナレバ}也。下^{リテ}沢見^ル蛇、蛇之穴^{ナレバ}也。如^キ虎之室^ニ、如^{キテ}蛇之穴^ニ而見^ル之、

曷^{なんすレゾ}為^{ナランヤト}不祥也。」

(『晏子春秋』による)

注 ① 景公——春秋時代の斉国の王。 ② 晏子——斉国の宰相、晏嬰。^{あんえい} ③ 寡人——王の一人称。

④ 不祥——不吉なこと。 ⑤ 用而不任——採用はしたが、仕事をさせない。

⑥ 虎之室——虎のすみか。

問一 二重傍線部(a)・(b)を、送り仮名も含めてすべて平仮名で書き下しなさい。現代仮名遣いでも良い。

問二 波線部(ア)・(ウ)をすべて平仮名で訓読しなさい。現代仮名遣いでも良い。

問三 波線部(イ)をすべて平仮名で訓読し、何と何が「不与」なのかを明らかにして現代語訳しなさい。訓読は現代仮名遣いでも良い。

問四 晏子が言う「三不祥」の内容を、発言の順番通りに五〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部Aを現代語訳しなさい。